

称号及び氏名	博士（人間科学） 安本 博司
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 31 日
論文名	「 コリア系移住者の民族継承—教育戦略と文化伝達に着目して— 」
論文審査委員	主査 田間 泰子 副査 酒井 隆史 副査 西田 芳正

論文要旨

本研究の目的は、日本におけるコリア系移住者が、その民族継承において、移住先での人々との「接触」によってどのような影響を受けるのかを明らかにすることである。

「はじめに」では、筆者の問題関心を述べる。筆者は修士論文において、韓国から日本に移住した親たちによる母語継承の教育戦略を研究し、その際にインタビューが在日コリアンとの接触によって民族アイデンティティと母語継承意識を強めるという現象を見出した。そこで、移住者の民族継承と教育戦略（母語継承を含む）における「接触」の影響、コリア系移住者が移住先である日本において、他の人々とどのように「接触」することで民族継承への態度を変容させるのかを研究課題とした。

第 1 章「コリア系移住者の移動と教育戦略」では、移住者の教育戦略に関する先行研究をレビューし、5 つの研究課題を導出する。【課題 1】として、移住の歴史的社会的背景が教育戦略に大きく影響するという先行研究の知見をふまえ、移住の理由と教育戦略との関連を考察する。そして、コリア系移住者を、その移住の歴史的社会的背景によって「韓国人ニューカマー」（主として 1980 年代以降に日本に移住した韓国人。以下、韓国人 NC とする。）、「朝鮮族」（中国籍朝鮮族の人々）、「在日コリアン」（親や祖父母世代が日本に移住した、現在は韓国・朝鮮籍、および日本国籍の人々）の 3 カテゴリーに分け、比較考察する。【課題 2】として民族継承を、母語の継承とそのための教育戦略、および文化伝達の重要な構成要素としてチェサ（제사、祖先祭祀）という 2 点に着目して考察する。移住地での母語継承と学校選択は、階層上昇のための教育戦略として行われるほか、民族継承のため、あるいはグローバル化する社会での能力獲得など多様な意味づけがありうるという先行研究の知見をふまえる。

【課題3】はジェンダーの視点である。教育戦略における母親研究の知見をふまえ、またコリア系移住者の教育とチェサにおいて女性が期待される役割の重要性を考慮し、民族継承における教育戦略とのずれや一致に注意しつつ、考察を行う。【課題4】は先行研究に見いだせなかった課題である。大阪という日本で最もコリア系移住者が集住する地域において、相互に移住の歴史的社会的背景の異なる彼／彼女たちが「接触」することがどのように影響するか、また日本人との「接触」がどのような変容をもたらすのかを考察する。【課題5】として、3カテゴリーのコリア系移住者を比較検討する。

第2章「韓国人ニューカマーの民族継承」では、8名へのインタビューを行い考察した。韓国からの移住者は自発的移住者であるが、女性については韓国社会の強い家父長制からの逃避の場合がある。移住直後の〈多忙期〉のあと、在日コリアンや日本人との「接触」によって強い帰国願望をもつが（〈疎外期〉）、やがて日本人と異なる韓国人としてのアイデンティティを肯定的に自覚し（〈参入期〉）、子どもに韓国語習得・民族継承させようとしていく（〈安定期〉）という変容のプロセスがある。母語継承は、上昇志向のための文化資本ではなく、帰国を実現するための手段、もしくは日本社会において「在日コリアン」や「日本人」との差異としての「韓国人」アイデンティティを維持するための戦略である。ただし、移住理由が逃避的である場合、迷いを含みつつ実践される。

第3章「朝鮮族の民族継承」では、11名へのインタビューを行い考察した。中国からの移住者は、「出稼ぎ」という経済的要因を背景にもっている場合が多い。彼／彼女たちは、移住直後の〈多忙期〉から〈達成期〉〈安定期〉を経るという時間的経緯のなかで、母語を含む複数言語の習得を文化資本として意味づけており、かつそのことが民族アイデンティティの一部となっている。「接触」によって在日コリアンに対する差別を知ることは、民族学校の回避をもたらしており、総じて日本社会に対する肯定的評価のもと、より上昇志向に適う日本人学校や中華学校が選択されている。

第4章「在日コリアンの民族継承」では、女性10名と在日コリアン青年連合（KOREAN YOUTH、以下KEYとする。）のメンバー5名へのインタビュー、および同連合40名へのアンケートを行い考察した。いずれも、自身としては日本への移住を経験していないので、第2章や第3章のような移住ステージによる把握は適さない。女性10名へのインタビューでは、在日コリアンの儒教的な文化と被差別経験のもと、彼女たちの「生きづらさ」が明らかにされた。そこで彼女たちが選択するのは、在日コリアンの家族が果たせない母語継承を子どもの民族学校に託すという戦略である。彼女たちは、同時にチェサの伝統的な継承を拒否するといった選択的な民族継承も行っており、彼女たち自身にとって新たな民族的アイデンティティの獲得となっている。

KEYへのインタビューからは、KEYとの「接触」が民族的アイデンティティを獲得する転機となった事例について考察され、また選択的な民族継承の実践も語られた。アンケートでは先行研究を参照し、民族継承を複数の要素に分けて質問した。「韓国語の習得」と幾つかの要素は相対的に強く希望され、「チェサの継承」や「同胞との結婚」は多くの回答者が

ら支持されないといった選択的な民族継承の傾向が、若手世代の特に女性において見られた。さらに、「韓国語の習得」はアンケートの自由記述やインタビューにおいて、民族継承の一要素としてのみならず、グローバルな社会を生きていくための文化資本とみなされているという回答があり、被差別を理由として習得を抑制するという意識は見られなかった。差別ゆえに家庭内で母語継承が不可能になった「在日コリアン」にとって、民族継承の新たなかたちを示唆するものである。

第5章「総合的考察」では、第2章から第4章までの結果から、コリア系移住者の3カテゴリーを比較する。「韓国人NC」は、日本での「接触」から葛藤を経験して民族的アイデンティティを強く意識し、帰国とその手段として母語継承を願う。やがて、日本社会への理解が進むことによって日本に適応する。しかしジェンダー規範によって、子どもの教育とチェサは女性たちの負担となっており、夫への遠慮が子どもへの母語継承を抑制する場合もある。「朝鮮族」は、中国政府の自治政策によって母語継承が家庭で実現されており、複数言語の使用を民族的アイデンティティの根幹としている。民族的アイデンティティは「韓国人NC」のように来日によって葛藤をともなって自覚されるというよりも、多言語使用（一部に母語継承を含む）が階層上昇のための文化資本であるという認識をともなって自覚される。「在日コリアン」の場合、日本社会における差別が家庭内外での母語継承を抑制し、民族アイデンティティは葛藤を含んでいる。女性の場合にはさらに儒教的文化による抑圧も葛藤をもたらす。周囲の人々との交渉をともないつつ、民族学校やエスニック・グループに参加することで、新たに選択的な民族継承が行われている。

以上、3カテゴリーの相違がモデル的に示された。他方、本研究の課題として忘れてはならない点は、個々の経験においては、人と人の「接触」がこれら3つのカテゴリーに収まりきらない多様性をもたらしているということである。たとえば、大阪への転居、結婚による集住地域への移住、民族学校の存在や、KEYのようなエスニック・グループの存在との「接触」などが挙げられる。今後の課題は、本研究で明らかにした民族継承のあり方の多様性と母語継承の多重的意味をふまえつつ、さまざまな「接触」のもつ力をさらに探求することである。

また、第4章で導入されている若手世代への着目や、選択的な民族継承という現象については、重要な研究課題として残された。

1) 研究テーマが絞りこまれている。

本研究は、コリア系移住者の親たちの経験が民族継承のあり方に及ぼす影響について、インタビューを主要データとして考察するものである。第1章では先行研究レビューにより、移住者の移住地でのさまざまな「接触」が及ぼす影響、それによって生じる変容に着目する必要性を論じた。民族継承の内容として母語継承とチェサ（祖先祭祀）を取り上げている。そして、調査対象を移住の歴史的社会的背景の違いにより「韓国人ニューカマー」「朝鮮族」「在日コリアン」に分け、集住地区をもつ大阪での「接触」がもたらす影響を比較することを研究課題として設定した。第2章では子どもをもつ「韓国人ニューカマー」（8名）、第3章では「朝鮮族」（11名）、第4章では「在日コリアン」（10名、および若手世代5名）へのインタビュー結果を考察し、第5章でこれらを比較検討し総合的考察を行った。以上から、研究テーマは十分に絞り込まれている。

2) 論文の方法論が明確である。

インタビューをデータとする考察が中心であり、方法論は明確である。なお、第4章の若手世代についてはアンケート調査（40名）も行い、インタビュー・データの考察を深めるために補完的に用いている。

3) 研究テーマについての先行研究調査を十分に行っている。

日本のコリア系移住者の歴史・エスニシティ・教育戦略・母語選択に関する先行研究、コリア系に限らず日本への／日本からの移住者の教育戦略に関する先行研究、および理論的な手がかりとして文化資本論と下位文化論を参照しており、十分に先行研究調査を行っている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

基本文献について、明確な課題意識にもとづき十分に吟味している。また、調査データについては、合計34名分のインタビュー・データを十分に吟味している。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

大阪は、全国で最も韓国・朝鮮籍の居住者が多く、特別永住者も最も多い地域である。本研究の着眼点の新しさは、第一にこのコリア系移住者の集住地区大阪をフィールドとしたこと、第二にそこでのコリア系移住者相互、および彼／彼女たちと日本国籍者との「接触」と変容に着目したこと、第三に対象者を移住の歴史的社会的背景から3カテゴリーに分けて比較研究したことにある。その結果、3カテゴリー間の民族継承に関する相違を指摘し、変容プロセスをモデル的に提示した。

さらに、第4章では若手世代へのインタビュー・データとアンケート結果をそれまでの考察に補完的に用いることで、まだ子どもを持たない若手世代の意識の多様性を示すことができおり、「在日コリアン」について先行研究にはない新しい知見も打ち出している。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

議論は、第1章で提示された研究課題にそって、第2章～第4章の各章でインタビュー・データに依拠した考察を行っており、第5章では総合的考察として3カテゴリーの比較と、それにも関わらず移住地での「接触」によって人々がさまざまに変容するさまを記述している。上記5)の新しい知見を、インタビューの豊かな語りを丁寧に着用することで説得的に論証しており、よって必要にして十分な議論と実証が展開されている。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本研究は、日本において被差別の歴史をもつ「在日コリアン」、中国で民族自治が一定認められてきた「朝鮮族」、そして「韓国籍ニューカマー」という3者を比較することを通して、民族継承が移住のマクロな歴史的社会的背景に大きく影響を受けつつも、大阪という地でのミクロな「接触」によっても多様に変容していく様相を明らかにした。後2者に関しては、民族継承におけるマクロな状況とミクロな移住先での経験との補完的な関係を視野に入れた変容のモデルを提示しており、当該分野の研究領域に新たな地平を切り開くものである。

また、3者の比較から、「在日コリアン」が差別的な社会における移住者の子孫として、他2者と異なる民族継承を行なおうとしている様相が明らかにされた。ジェンダーと世代、そしてエスニック・グループの存在が、これからの民族継承のあり方に関わる重要な要素として指摘されている。

本研究は、特にコリア系女性たちが夫や移住地の人々との「接触」によって変容していくプロセス、そのなかで生じる民族的アイデンティティの自覚や相対化、新たな獲得のプロセス、そして民族的アイデンティティに対する母語継承の多様な役割を、豊富なインタビューを用いて示しており、今後重要な研究課題として発展すべき独創性を備えているといえる。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。